

トップの視点

社会福祉法人 真珠園 施設長 湯浅 浩氏

身体障害・知的障害・精神障害・母子家庭・生活保護家庭の人たちの通所授産施設として、人々とのつながりを重んじ、障害を持つ人と健常者が助け合いながら作業を行い、人を大切にする施設づくりを目指す園の施設長、湯浅浩氏にお話を伺った。



「真珠園」という名前を聞いた人は、どこにあるのかを知らない人が多いと思います。真珠園の紹介の前に、大まかに施設の話をします。

真珠園の説明

正式な認可は昭和39年と古く当初は真珠の加工作業をしていたのですが、真珠園という名前がついたと聞いています。園を利用する人を「利用者様」と呼んでいます。現在32名が在籍しており、最高齢の方



は79歳ですが、毎日仕事に励んでいます。利用者様は身体の方・知的の方・精神の方・生活保護を受けている方・発達障害の方・長期引きこもりで就労が困難な方などがいらつしやう、当園は多様なニーズに対応しております。聴覚障がいの方もおり、個別の障がい特性に対応するのにかんがひ、専門性は必要とされます。

新たな取り組み

平成21年に中津低収入保存会にわらじを贈呈しました。以後は毎年わらじを納品していましたが、それを何とか一般に売れる商品として販売できないかと当園理事の宇都宮氏（新規開発指導者）とともに考え、小さくしてわらじストラップとして販売することを考案しました。当初は試行錯誤の連続で、とても商品になるような物ではなかったのですが、皆さまのご支援もあり、何とか販売にこぎつきました。平成22年9月に特許庁に意匠登録を申請し翌年2月に正式に意匠登録の認可がおりました。小さな社会福祉

法人が手作り品で特許認可がおりることは珍しいことだと思っております。このわらじは一つ一つ手作業で作成しています。最初は理事と二人で作っていた物が、今では四人の利用者様が作れるようになりました。手芸用の糸を使って本物のわらじと同じ作り方で編んでいます。一つずつ丁寧に心をこめて作ることで、多くても一日に二人最高10個しか作れませんが、作っている利用者様の姿は生き生きとしています。この製品の特色ですが、「金色は金運・緑色は健康運・ピンクは愛情運・青色は学業運」というように色ごとに風水で分けています。販売も少しずつ伸びており、現在は県下15ヶ所で販売しています。各種イベントにも積極的に参加し、対面販売を実施しております。また、この売り上げ金は、全て利用者様の工賃として払っています。

障がいを持つ人への対応

知的障がい者や精神障がい者又は発達障がい者は環境に適応するのが難しい場合があります。私たちが健常者が思っている以上に気持ちよく生活できるように、壊れやすいと思われがちですが、長期に引きこもっている人が、直ぐに社会に出ることは容易ではありません。ある程度の準備期間と自分でもやれるという成功体験が必要となります。それは少しずつ段階を上げて、お手伝いをするのが、社会福祉法人の使命だと私は思っています。軽度の手をさしただけで、安心して暮らす人もいます。これらに基づき、最後にありますが、これからは社会福祉法人の意義が問われる時代に入ります。経済が停滞して人のつながりが希薄になっている今の時代こそ、社会福祉法人が本来持つべき機能を発揮すべきだと思います。人は人の中で成長します。社会福祉法人真珠園は人を大切にする施設づくりをめざしています。

開運わらじストラップ



中津 蘭学とパイオニア精神

5 良沢と一節截

特定医療法人
川寫整形外科病院
理事長
川寫 真人氏

中津藩医・前野良沢（1723～1803）が盟主となつて西洋の解剖書『ターヘル・アナトミア』を翻訳した『解体新書』は、真の意味で、蘭学の幕開けであり、日本の科学史はここに始まったといっても過言ではない。

九代目の藩主奥平昌昌（1744～1780）は、母の腰骨骨折を、たまたまカピタン（長崎・出島のオランダ領事）の江戸参府に付き添った伊東正敏氏が素晴らしい音曲を聴かせてくださったのは、一大事に感動し、改めて良沢の多才と豊かな人間性を認めたこととなった。一節截を復元しようという機運が高まり、今年に入ってから当院にて『一節截を演習する会』が「マンダラゲの会」の支部として発足した。月一回の練習が、伊東正敏・尺八師範の指導で続けられており、2011年9月18日には中津城観月祭で演奏された。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

『ターヘル・アナトミア』の翻訳は、蘭学を学ぶための重要なツールとして、蘭学を学ぶ人々の間で広く使われていた。良沢は、この翻訳を、自分の知識と合わせて、独自の解釈を加えて、独自の『解体新書』を作成した。この『解体新書』は、蘭学を学ぶ人々の間で、非常に重要な存在となった。

良沢は、この『解体新書』を、自分の知識と合わせて、独自の解釈を加えて、独自の『解体新書』を作成した。この『解体新書』は、蘭学を学ぶ人々の間で、非常に重要な存在となった。

良沢は、この『解体新書』を、自分の知識と合わせて、独自の解釈を加えて、独自の『解体新書』を作成した。この『解体新書』は、蘭学を学ぶ人々の間で、非常に重要な存在となった。

良沢は、この『解体新書』を、自分の知識と合わせて、独自の解釈を加えて、独自の『解体新書』を作成した。この『解体新書』は、蘭学を学ぶ人々の間で、非常に重要な存在となった。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

良沢は幼い頃に孤児となり、伯父の流産医・宮田全沢という流産の医師に育てられた。全沢が良沢に対して、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、「人のしなむ」とをやらせ、良沢は当時として誰も見向きもしない『一節截（ひとよぎ）』というのはなほ音の出にくい竹の筒を吹いたり、猿まわしを学ぶ等していた。

社会福祉法人

真珠園

作業項目

- 自動車電線事業
- ブレーカーの加工作業
- 開運わらじストラップ・ウエス加工作業

〒871-0015 中津市大字牛神423-7
TEL: 0979-22-2138
FAX: 0979-22-2168

ここがポイント
身体障害・知的障害・精神障害・母子家庭・生活保護家庭の人たちの通所授産施設です。障害を持つ人と、健常者が助け合いながら作業をしています。

施設の紹介
各種作業を受託し、定員30名の利用者それぞれにあった作業を考慮しながら、楽しく・元気に取り組んでいます。

